

【自著紹介】 落合貞夫 『「悪」とたたかう村上春樹』

(文藝春秋企画出版部 2021年5月)



本書は、村上春樹が2020年までに発表した14篇の長編小説のそれぞれについて、私見もまじえながら包括的な解説を試みたものである。村上春樹に関する研究書や解説書が非常に多い中で、長編のみを対象にしたところが本書の特徴である。各長編についてのこれまでの研究状況やその到達点をまとめ、読者諸氏の便宜を図ることを第一義的な目的にしている。大学生にも十分理解できるように、また入門書としても読めるように配慮して書いたつもりである。

執筆に当たっては、可能な限り最新の論文や著作に目を通すようにした。したがって、拙著は多くの研究者や評論家の業績を土台にしたものである。が、調査の過程で発見できたものも幾つかあった。

たとえば、『1Q84』では、カルト教団「さきがけ」の教祖が、巨漢で髪が長く視覚に障害があることから、オウム真理教の麻原彰晃を彷彿させる、と指摘する人は多い。しかし、本書では、主人公の天吾こそカルト教団のリーダーになる人物、すなわち麻原彰晃となる人物ではないかと考えた。それは、天吾と麻原の学校年齢が同じであり、どちらの父親も中国や朝鮮からの引揚者であることや、二人とも高校時代は柔道の選手で、しかも寮生活をしていたことなど、あまりにも類似点が多く、偶然とは思えないからである。「善が次の瞬間には悪に転化する」という『1Q84』のテーマからしても、そのように推察することが妥当であろうと思う。

その他にも、たとえば『ノルウェイの森』では、死んだ直子の衣服をつけたレイコさんも自殺するであろうこと、また『騎士団長殺し』では、小田原のアトリエで聞く夜中のチリンチリンという鈴の音は、村上の父が毎朝欠かさず唱えていたお経に着想を得たものではないか等の私見を挿入している。

なお、『「悪」とたたかう村上春樹』という題名は、村上文学に親しんでいる人々にとって違和感を覚えるものかも知れないので、若干の説明をしたい。村上春樹は初期のデタッチメントという態度から社会や政治に無関心な作家と見做されてきたし、実際、社会問題に消極的な若い読者層に受け入れられてきたとあってよい。そして、いつの間にか作家村上には、社会に背を向けた

イメージが定着してしまったのではないか。しかし、それは表面的なイメージに過ぎない。

村上の最初の短編集は、『中国行きのスロウ・ポート』であった。最新の長編『騎士団長殺し』には、中国大陸での生々しい戦争体験が挿入されている。作家活動の初めから最近に至るまで、村上にとって中国は重要なモチーフとなっており、中国を抜きにして村上文学は語れないと言ってよい。村上の原体験は、父の中国大陸での戦争体験であることは周知のとおりである。捕虜となった中国兵を軍刀で斬首する話を聞いた少年村上は、日本という国家システムの怖さというものを父親から学んだはずである。同時に、村上自身も悪しき遺伝子を受け継いでいるのではないか？という深い疑念をもつことになり、そこから自由になりたいという強い思いを抱くようになった。すなわち、少年時代の原体験から、「国家システム」とか「悪しき遺伝子」と対峙することが、村上の宿命になったと考えられるのである。それは、とりもなおさず“「悪」とたたかう”という姿勢を作家にとらせることになったのであり、40年にわたる作家活動の一貫したモチーフになっていると言ってよいだろう。

【落合貞夫（沖縄文学、オーガスト・ウイルソン、村上春樹）】